

中山間地域における移住者の生活空間と接客の場について

－佐賀市富士町・三瀬村を対象として－

A Study of living Space of Migrants and Reception Place for the Guest in the Mountainous Area
- Fuji-cho and Mitsuse-mura in Saga City -

○ 朴宰燁*1, 後藤隆太郎*2
PARK Jaeyob, GOTO Ryutaro

This study focused on the living space of migrants, including interaction and hospitality, in the mountainous areas, and clarified the following.

- 1) In the lives of migrants, interaction with people inside and outside the area is important as well as residence and livelihood and we can find a remarkable case.
- 2) From the survey of three cases, the development process of the living space was clarified, including the house, the buildings that interact with guest and the outdoor space.
- 3) As a result of the development, it was possible to confirm the "place of customer service" that invites friend etc. privately, and it can be noted that it was realized because of the mountainous region.

キーワード： 移住者, 生活空間, 地域内外との交流, 接客の場

Keywords: Migrants, Living Space, Exchange with the inside and outside the area, Reception Place for the Guest

1. はじめに

1-1 背景と目的

現在の中山間地域のような農村地域では、集落住民の高齢化や人口減少などさまざまな課題がある。佐久間ら¹⁾は、家屋などの居住空間、田畑・山林などのなりわい空間を適切に次世代に送り届けるには、移住者など地域外との繋がりが重要であると述べ、特に地域外の人々との交流や移住者と存在が重要だと指摘している。また、西村ら²⁾は、移住者と地域住民との関係に着目し、移住者が地域づくりに参加できる場の必要性を確認し、筒井ら³⁾は、農山村への移住と生業の視点で農村の交流から移住までのプロセスを整理している。さらに、小山ら⁴⁾は、宿泊・体験施設が訪問者や移住者の活動拠点になって地域住民との交流が発生することを指摘し、長谷川ら⁵⁾は、伝統的な住居空間を移住者が一時的イベント空間として活用し、新しい交流を誘発する可能性を指摘している。

本研究では、以上の研究を踏まえつつ、新しく中山間地域で生活を成立させている移住者に注目し、その私的な

空間で行われる交流や接客のあり方を考えようとするものである。

具体的には、私的な生活空間¹⁾において地域内外の人々とどのように交流を行っているのか、特に生活空間に人々を招き入れ、主体的な交流・接客の取り組みが認められる生活空間の事例を見いだし、そこでの「接客の場」がどのように成立しているのか、実態とその特徴を明らかにしたい。

これらにより、中山間地域の私的な生活空間における交流・接客に関する居住者の要求、「接客の場」の成立条件に関する基礎的な知見を得たい。

1-2 研究の方法

本研究の調査および研究方法は次のとおりである。

- 1) 中山間地域としての佐賀市富士町・三瀬村を対象とし、そこで新しく生活空間を成立させている移住者に注目し、アンケート（有効回答数46名）の結果を用いて、その生業等の基本属性、移住地域の選択や移住後の生活を整理し、地域内や地域外との関わりや交流の傾向につ

*1 佐賀大学大学院工学系研究科 博士後期課程

Graduate School of Science and Engineering, Saga Univ.

*2 佐賀大学理工学部 准教授・博士（工学）

Associate Prof., Department of Science and Engineering, Saga Univ., Dr.Eng.

いて整理する。

2) 接客の場を「私的な生活空間で居住や生業が営まれつつ地域内外の人々を招き入れる交流・接客の行為が認められる場」と定義し、上記の移住者へのヒアリング調査を踏まえ、居住や生業の場を主体的に展開させ、都市部の人々を含む地域外との交流や接客の営みが顕著に認められる事例について、それぞれの生活空間の実態や成立過程を明らかにする。さらに、交流や接客の行為が認められる「接客の場」の特徴や成立条件について考察する。

2. 移住者の生活と地域内外との関わりや交流について

2-1 対象とする中山間地域と移住者

本研究では、中山間地域において移住者が増加し、都市部を含む地域外との関わり変化が認められる佐賀県佐賀市富士町および同三瀬村^{注2}を対象とする(図1)。

ここでの移住者について、移住相談などを行う地元団体や移住者から情報を得て、移住後15年以内の50世帯(名)を把握し、46世帯(名)の世帯主等に対面式アンケートを実施した。さらに、その約半数については居住や生業、交流の成立についてヒアリング調査を実施した^{注3}。

当該地域の移住者の分布として、図1に大字単位、また集落単位^{注4}の移住世帯の有無を表示している。当該地域においては、100世帯以上かつ公的施設などの集まる3つの拠点集落にはいずれも移住者を認めることができるが、それ以外の一般的な集落にも少なからず移住者が居住し、約3分の1の集落に移住者が認められる。

アンケート結果より、富士町・三瀬村の移住者の属性

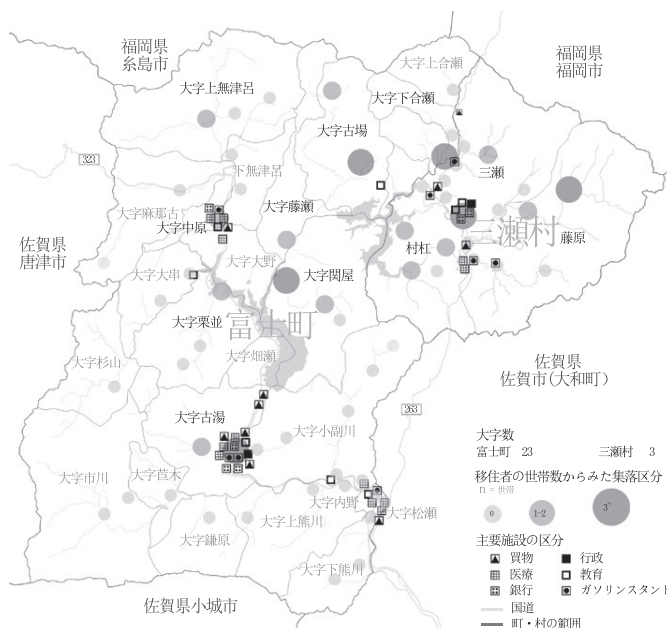


図1 集落における移住者の分布と主要な施設

などとして、移住者の年代は、60代以上が10世帯、40～50代が19世帯、20～30代が17世帯と、各世代に及んでいる。家族構成は、単身者が17世帯とやや多く、夫婦14世帯、2世代と3世代以上を加えて15世帯と多様である。また、居住年数は、10年以上が10世帯、5～10年が6世帯、3～5年が11世帯、3年未満の19世帯であり、近年の増加傾向が認められる。

移住者の移住前の居住地について整理すると(図2)。福岡県が16世帯、佐賀市(富士町・三瀬村以外)が11世帯で、近隣都市を含む近隣地域から約6割と多いが、関東が10世帯、九州各県から5世帯と、遠方からの移住も少なからず認められる。

次に、富士町・三瀬の移住者が「地域を選択する上で重視したこと(3つまで選択可)」について、図3に示す。「自然の豊かさ」が34世帯、「地域資源」が27世帯と、自然を含む地域的な特性を移住者は重視する。次いで「親類や知人の存在」が15世帯、「都市との距離」が14世帯と、現地の人との関わりや立地条件等を重んじる場合が少なからずあり、地域内や地域外の人々との関係が、地域選択の一条件となることがうかがえる。

以上のように、当該地域の移住者は各年代や家族構成が認められ、また、移住して10年以上の中山間地域に定着する移住者も含まれている。また当該地域は、近隣都市から1時間圏内であるなど、都市部を含む地域外からの人々との交流が行われやすい条件を有しているなど、

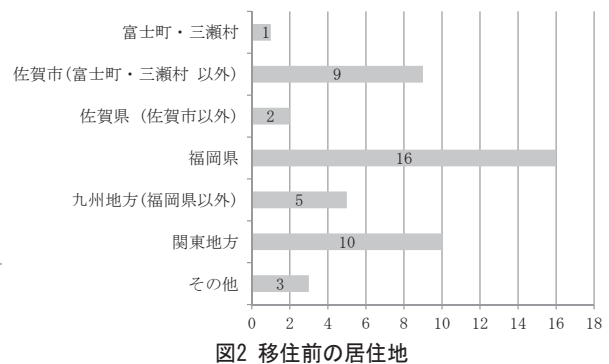


図2 移住前の居住地

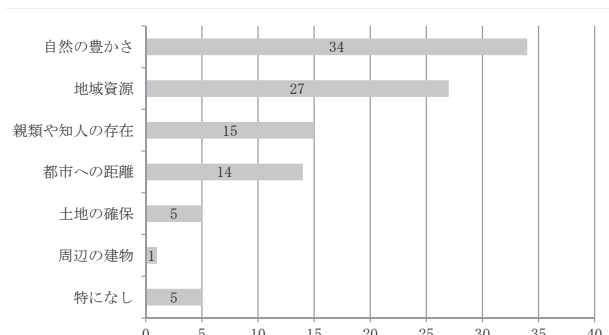


図3 地域を選ぶ上で重視したこと(3つまで選択可)

本稿で注目する地域内外の人々の交流や接客と生活空間との関わりを考える上で、適切な対象地域といえる。

2-2 移住者の生活と地域内外との関わり

ここでは上述のアンケート結果を用い、移住者の生活について、特に地域内や地域外との関わり、交流の傾向を整理する。

移住者の生活において重要な要素の1つ、「生業」の集計結果を図4に示す。「農業」は兼業を含み14世帯（約3割）と多く、これらの移住者は、地域内や居住する集落で農業等の生産活動を営むため、地域内の人々との関わりが比較的強いといえるが、生産物を地域外の人々に直販する等、地域外との関わりも一部で認められる。

「勤め・パート」の10世帯は、主に地域内の生活や営みといえるが、一部は地域外からの来客を主とするカフェ等でのパート等であり、生業を通じて地域外の人々と接する機会も多い。「飲食店（自営業）」が8世帯、「専門職（自営業）」が9世帯、主に地域外の人々を顧客として生業を営んでおり、集落等で営みつつも地域外とも交流が多いと考えられる。一方、「仕事なし」が5世帯と、生業として地域内外と関わることはないが、一部では趣味や知人を自宅に招くなどの個人的な地域外との交流を行う生活もうかがえた。

次に、移住者の地域内との関わりを捉えるために、「移住者の地域活動への参加（複数選択可）」の集計結果を図5に示す。

まず、「集落会議」が33世帯、「公役」が38世帯、「地域の祭り」が30世帯、など住民として基本的に必須といえる活動には大多数は参加している。ただし、「特になし」の3世帯が代表するように、一部に地域活動に参加しない移住者もいる。

また、「消防団」6世帯、「子供会」7世帯、「子供お年寄りのボランティア」6世帯など、地域社会の既存組織や活動にも一定数の参加が認められる。さらに「有志のイベント」13世帯、「観光ボランティア」が5世帯、「講演会」が5世帯など、趣味や知人との関わり、地域づくり等の活動への参加も少なからずある。

次いで、移住前の期待と移住後に満足している項目の比較（それぞれ3つまで選択可）」を図6に示す。

「自然の豊かさ」が26世帯、「仕事」が15世帯と、多くの移住者がこれらを期待する。これらは比較的多くが移住後の満足としても回答するが、移住前よりも回答数が減少する傾向もある。

移住前後の比較として顕著な項目が「親類や友人との

交流」であり、13世帯が移住後に満足として、回答している。ヒアリングより、これらは親類ではなく、移住前からの知人や移住後に培われる友人などのと交流や活動が多く、これらの交流に満足する移住者が少なからずいることが分かる。

以上の結果から、一部の移住者は居住する集落や地域内との関わりが希薄であるが、大多数の移住者は、生業や地域活動を通じて、居住する集落をはじめ地域内との関わりや交流することが生活の基本となっている。

その上で、地域外の人々との関わりや交流が少ない移住者と、強い移住者の両者があると考えられる。これらの差異は、生業の形態や個々の生活の志向やその展開と関係するものと推察できる。

これらを踏まえ、次章では、特に地域外の人々との交流が顕著に認められる生活空間の実例に注目する。

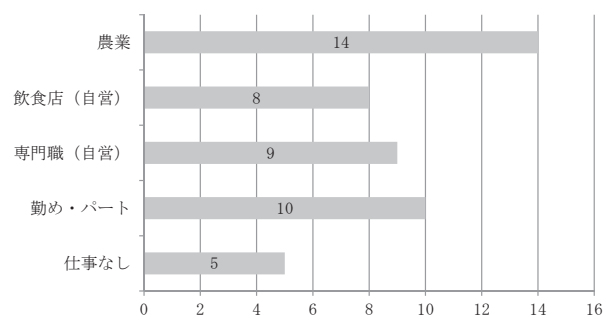


図4 生業

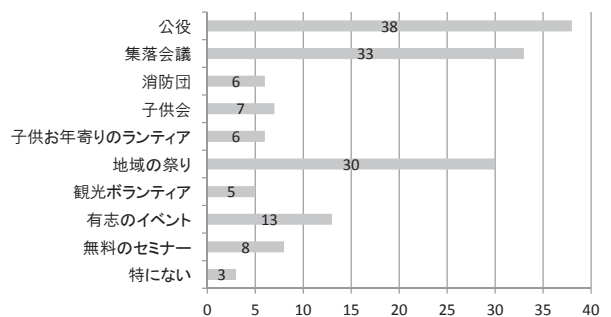


図5 地域活動への参加

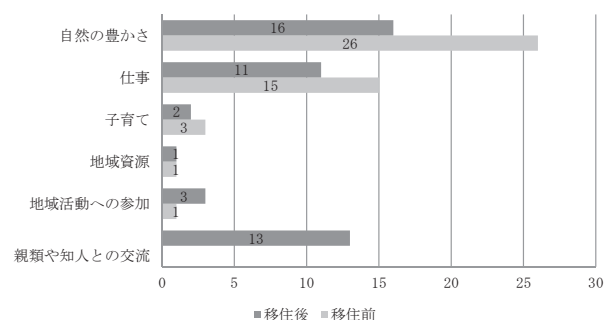


図6 移住前の期待と移住後に満足する項目の比較

3. 生活空間における居住や生業を含む交流の展開

本章では個々の移住者が私的な生活空間で居住や生業を含む交流・接客の成立(確立)を理解するために、地域外の人々との交流が見られる3つの事例を取り上げる。それぞれ移住前を含む生活空間の展開過程、交流・接客が生じる「接客の場」について分析する。

3-1 拠点集落における生活空間と地域外の人々との交流

1) 拠点集落におけるA氏の生活空間

拠点集落到に住む移住者の1つの事例として、シェアハウスに居住し、カフェでパートをし、営業・時間外にもカフェを有益に使って交流・接客を行うA氏を取り上げる。A氏のシェアハウスは、旅館施設が集まる温泉街にあり、その近くにカフェがある(図7)。

A氏を含む拠点集落到に住む移住者は、集落内9世帯、集落離れ^{注5)}に1世帯が住む(図8)。集落内に住む一部の移住者は、他の集落または地域外で生業を営み、集落内では居住のみである。しかし、集落内で居住と生業を営む移住者は、主に旅行などで集落を訪問する地域外の人々を対象とする生業することが分かった。

A氏が生業を営むカフェは、地域内の人々も一部訪問するが、主に温泉旅行に来た地域外の人が食事または情報収集(空き家など)などで訪問する。

2) A氏の生活空間の展開

A氏がいかに「接客の場」を成立したかを理解するため、移住前からの居住と生業の展開を図9に示す。A氏は、大都市の会社に勤める頃から、自然の暮らしをしたかった。東日本大震災後、地方都市の実家に戻ることになった。拠点集落の空き家改修ワークショップ(現、カフェ)に参加し、これをきっかけに集落住民がカフェを開業する時、手伝うことになった。最初は実家から通勤しながら手伝っていたが、現在は拠点集落内において住民が運営するシェアハウスに住む。

3) A氏の地域外の人々との交流・接客と接客の場

A氏が主催とする主な交流・接客を図9に示す。また、移住展開期を中心に「接客の場」の実態を見てみる。

A氏は、満月酒場という名前で地域内の移住者同士が営業時間以後のカフェで月2回食事や飲み会の交流をした。それが、音楽をする人を招き入れ、移住者や知人(移住希望者)など地域内外の30名程度がsnsを通じて月1回の交流する。主な内容は、音楽ライブとアルバム、手作り・食べ物などの販売または空き家情報など集落移住について情報交換が行っている。

また、A氏が主体者ではないが、協力者として行われた交流・接客は下のとおりである。A氏が最初参加した交流



図7 拠点集落におけるA氏の生活空間

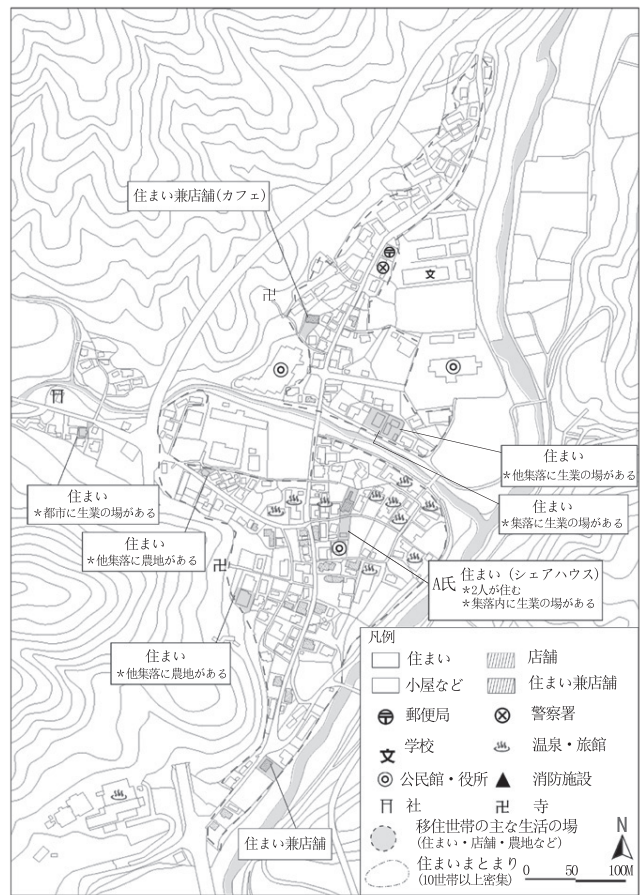


図8 拠点集落における移住者の生活空間とその位置

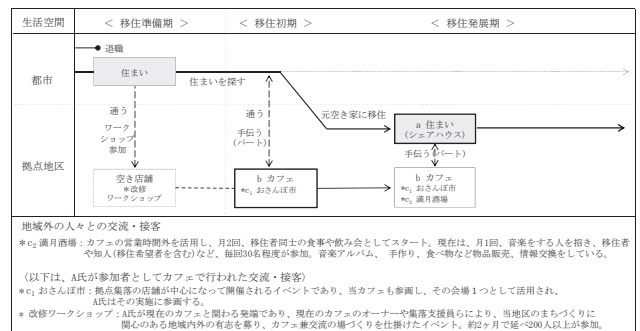


図9 A氏の交流・接客を含む生活空間の展開

は集落住民が主催した空き店舗を改修ワークショップである。このワークショップは、元々小さな店舗（青果店）だった空き店舗を改修してカフェを作ることだった。約2ヶ月間、集落住民、学生、NPO、移住希望者など地域内外の人々延べ200人以上がボランティアとして参加した。主に水回りを作りや手作りの内装、テーブル作りなどをした。

最近では、「おさんぽ市」という名前で拠点集落の店舗が中心になって毎月1回地域内外の不特定多数の人々と交流をしであり、当カフェもその会場の1つとして活用され、A氏はその実施に参画する。以上のより、これらより自らの「接客の場」を成立させる背景として、その以前の協力者として交流への参加が関係していると考えられる。

3-2 集落離れにおける生活空間と地域外の人々との交流

1) 集落離れにおけるB氏の生活空間

集落離れにおいて住む移住者の1つの事例として、ここでは畜産・農場・カフェなど多角的な生業を展開しつつ生活空間を有益に使っているB氏を取り上げる。

B氏は集落離れにある丘の北側に住んでおり、丘の南側にカフェと交流の場がある。東側に河川が流れ、西側に農地（水田）と養鶏場がある。集落に向かう道路は、南側にあり、道路沿いに駐車場と空き地がある（図10）。

B氏を含む集落に住む移住者は、集落離れに3世帯が分散して住む（図11）。集落離れに住む移住者は、居住と生業の空間が一致する。豊かな自然環境を活用し、地域外の人々に提供しつつ生業をする。

B氏が営む週末カフェは、地域内の人々も一部訪問するが、主に食事や自然などを求めて来た地域外の不特定多数の人々がほとんどである。

2) B氏の生活空間の展開

B氏がいかに「接客の場」を成立したか理解するため、移住前からの居住と生業の展開を図15に示す。B氏は、都市部の会社に勤める頃から、新しい暮らしについての考えがあった。農家に転職した知人との付き合いで農業の講座に参加、そこで集落住民と知り合い、集落内の空き家（借家）と農地（借家）を入手した。移住初期には、集落内に住み会社に通勤した。趣味的に農業をしたが、多角的農業をするため会社を辞め、集落離れにて養鶏場を始めた。しばらく集落内に住んでいたが、その後、養鶏場の近くに住まいを新築して転居し、さらに、住まいの南側の空き地にカフェを新築、開業している。

3) B氏の地域外の人々との交流・接客と接客の場

B氏が主催とする移住発展期の交流や「接客の場」の実態を整理する。

B氏は、大学生、会社員、主婦などの本が好きな地域外の特定少数の人々（会員）とカフェの営業時間外に、月1回、討論かつ食事などの交流をしている。一つの本を選定し、お互い意見交換する読書会であり、簡単な茶話会も合わせて行っている。

なお、このカフェの建物は、集落住民、移住者、地域

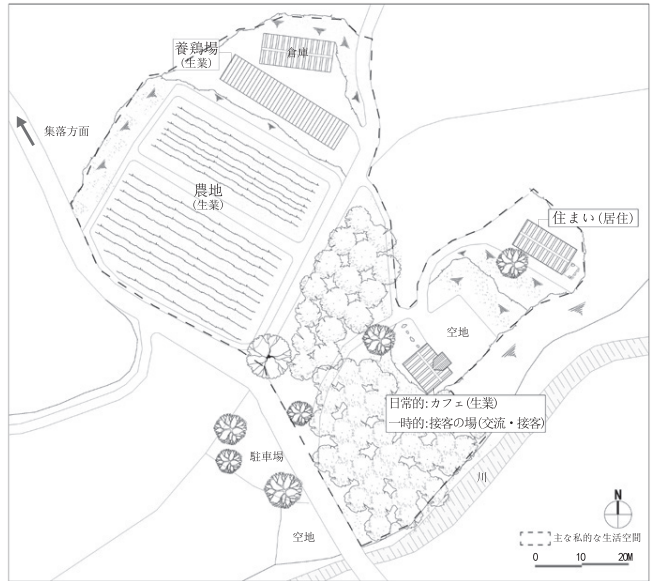


図10 集落離れにおけるB氏の生活空間

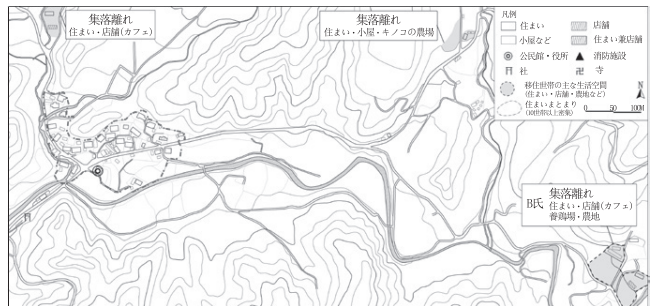


図11 集落離れにおける移住者の生活空間とその位置

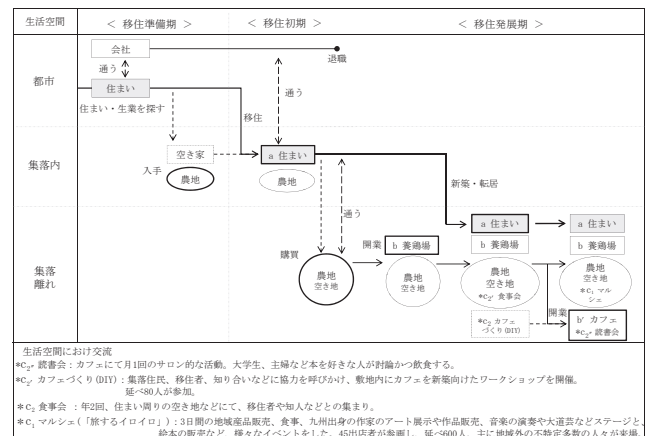


図12 B氏の交流・接客を含む生活空間の展開

内外の知人など（特定少数の人々、延べ80人）と一緒に約6ヶ月間のDIYで作った。また、この取り組みと前後して、移住者や知人（移住希望者）など地域内外の特定少数と定期的に（年2回）、空き地で食事会など交流を行っている。

カフェの成立後、「旅するイロイロイロ」と言うマルシェをカフェ、農地、交流の場（空地）、駐車場など生活空間全体において、3日間（2019年）実施した。地域のNPO、読書会、移住者など地域内外の様々な団体や人々が協力し延べ600人の不特定多数の人々が訪問した。

以上の交流・接客とその「接客の場」の実態より、生活空間内で段階的に交流・接客と「接客の場」が拡大する。特に交流・接客の対象に合わせて「接客の場」も変化（展開）する。

3-3 集落内における生活空間と地域外の人々との交流

1) 集落内におけるC氏の生活空間

集落内に住む移住者の事例として、ゲストハウス・カフェなどの生業を展開し、2階建て古民家を有益に使っているC氏を取り上げる。C氏は集落内の道路側にある古民家をカフェ兼住まいとしており、同じ地に駐車場、庭がある。周りには借りた農地があり、1つは、ゲストハウスの南側と、北側の河川近くにある（図13）。

C氏を含む集落に住む移住者は、集落内3世帯、集落離れに2世帯が住む（図14）。集落内に住む移住者は同じ地域内に生業をもち、地域資源を活用しつつ地域内の住民との関わりが見られる。

C氏が営む週末カフェには、地域の食材で作った食事の提供や健康についての講話会など、地域外の人々（不特定多数）の来客がある。

2) C氏の生活空間の展開

C氏が「接客の場」をいかに成立させたかを理解するため、移住前からの居住と生業の展開を図15に示す。C氏は、都市部で食育指導士として働く時から、体に良いものを提案し、デトックス等の有効性を伝えていた。そのため、体調がすぐれない人が休めるゲストハウスをするため、集落内にある現在の物件を入手した。最初は、1階をゲストハウス、2階を住まいとし、都市部の自家にも一時的に帰宅した。その頃、ゲストハウスを手伝う人でき、空き倉庫をカフェとして改修して、一緒に運営した。現在は、集落の農地を借りてゲストハウスやカフェで使う野菜を作る。さらに近の集落内にある空き家（借家）を活用しシェアハウスとして運営している。



図13 集落内におけるC氏の住まいや生業

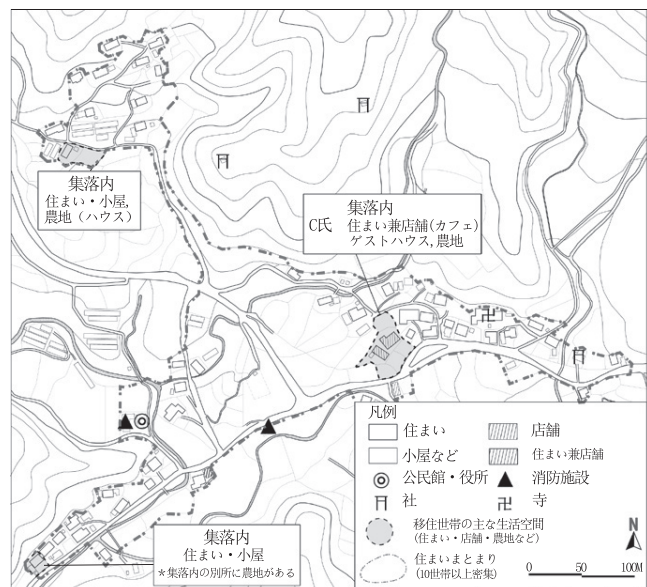


図14 集落内における移住者の生活空間とその位置

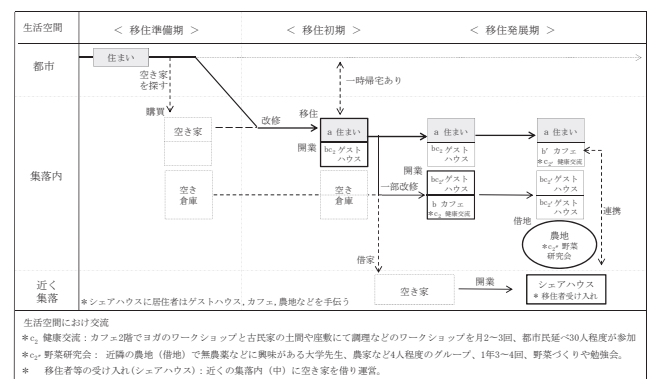


図15 C氏の交流・接客を含む生活空間の展開

3) C氏の地域外の人々との交流・接客と接客の場

C氏が主催する移住展開期の交流・接客と「接客の場」の実態を整理する(図15)。

C氏は、ゲストハウスを営みつつ、健康に関心がある地域外の特定少数の人(ゲストハウス予約者または交流申請者)が月2~3回、古民家カフェの土間や座敷(調理)、ゲストハウス2階や一部の部屋(ヨガと瞑想)で交流・接客を実施している。毎回20~30人程度が参加し、調理、ヨガ、瞑想などのワークショップ実施し、古民家の座敷で参加者が自己紹介やどんな想いで交流したかなど話す茶話会をしている。

その他に、大学生、農家など地域外の特定少数の人々と無農薬などの研究会を行っており、年3~4回ゲストハウスの南側や北側の農地(借地)の一部で実験的に野菜を育てている。その際にも作業後には古民家の座敷でお茶会をしている。

以上の交流・接客とその「接客の場」の実態より、私的な生活空間のみではなく、集落の屋外なども含み「接客の場」を展開している。また、古民家の座敷など、既存の接客空間なども「接客の場」として活用されている。

3-4「接客の場」の成立と特徴

上記の3つの事例を通して住まいや生業の行為を含む生活空間の中でどこに交流・接客の行為が発生し、「接客の場」が成立するのか、その特徴を知るため主に建物とその行為に注目する。まず、行為を居住(a)、生業(b)、交流・接客(c)と分け、さらに、交流・接客は、不特定多数の場合(c1)、特定少数の場合(c2)、生業に特定少数との交流・接客が含まれる場合(bc2)と表現する(図16)。また、他の建物に同じ行為または内容が一部変化する場合に「'」で示す。

生活空間を成立する初期(i, ii)では、居住や生業を主な行為として建物が成立する。その後の展開期(iii, iv)において、既存建物の改修または新しい空間の創出を通じて生業の行為が追加し、同時に特定少数との交流・接客の行為(「接客の場」)が生じている。

つまり、「接客の場」は、はじめから成立するのではなく、居住や生業の行為が安定した後に、交流・接客が生活要求としてあって、敷地を含む私的な生活空間に地域外の人々を招き入れる場として「接客の場」が成立すると考えられる。

4. まとめ：交流・接客の場の特質

中山間地域における移住者の生活において、居住や生業の行為と共に集落や地域内との交流が重要である。さらに、一部の移住者にとっては地域外の人々との関わりや交流・接客が重要である。今回は、多数の移住者の生活実態を踏まえ、3つの顕著な接客の場を抽出でき、それぞれの私的な生活空間とそこでの交流・接客の形成過程や内容の実例を提示した。以上の3事例を踏まえて、接客の場の特徴や成立条件を4つに整理する。

1)場の成立：はじめからその場や運営などが確定していたのではなく、生活空間として住まいと生業の場が展開した結果として成立している。

2)場やそのしつらい：集落住民や知人など特定少数との交流で新築や改修し、場所(建物)の歴史性や物語を維持・持続することだけではなく、地域内外の人々との関係づくりも工夫されて、都市部にはない自然や集落環境とともに成立する。

3)交流・接客：集落や移住者の生活空間と関わる志向性とテーマをもった文化的な営みとも言える。加えて、食事やお茶会など共に食す行為を通じて参加者同士の交流が展開・発展している。

4)生活空間における接客の場：主催する生活者にとっては日常的な生活な場であるが、参加する地域内外の人々には、非日常的で、半公的な場である。

以上接客の場の特徴や成立条件は、私的な生活空間に

	段階	< 集落外 >	< 集落内 >
A氏	i・ii	a	b
	iii・iv		b, c ₁ , c ₂ ★ a
B氏	i	a	b
	ii		b a
	iii		b a c ₂ ★
	iv		b a b', c ₂ ' ★
C氏	i・ii		a bc ₂
	iii		a bc ₂ bc ₂ ' ★ b, c ₂
	iv	a ★	bc ₂ ' bc ₂ '
< 移住者の行為 > ・ a : 居住 ・ b : 生業 ・ c ₁ : 不特定多数との交流・接客 ・ c ₂ : 特定少数との交流・接客 ・ bc ₂ : 生業に特定少数との交流・接客を含む ★ : 接客の場			

図16 生活空間における行為と建物からみた「接客の場」

において新たな交流を生み出すための基礎的な知見といえる。ただし、今回の対象地域は中山間地域ではあるが、福岡県糸島市・福岡市早良区、佐賀県唐津市など大都市や地方都市と隣接し、人的・物的往来が頻繁でネットワークを形成しやすいことが、接客の場を形成する背景として不可欠と考えられる。

さらに、移住者の生活空間における意味を考察するならば、都市の住まいにおいて希薄になりつつある接客空間が、自然を含む集落や生活空間を活かして実現していると考えられることもできる。その詳細は今後の検討課題としたい。

注

1. 私的な生活空間は、住まい、生業、交流などの行為が起こる空間(建物、敷地、空地など外部空間を含む)に定義する。なお、その空間を所有する場合に加え一時的に占有する空間も含む。
2. 富士町・三瀬村は大都市(福岡市)や中都市(佐賀市)、小城市、唐津市まで1時間~30分程度の距離に位置し(図.1)、2005年(平成17年)佐賀市・諸富町・大和町・富士町・三瀬村が合併(新設合併)し、新たに佐賀市となった旧富士町と旧三瀬村に相当し、主要機関の施設が市(県)で合併し機能が縮小し、1950年代に人口のピークを向かえ、現在は高齢化率も高くといわゆる収縮的な傾向がある。
3. 調査は同時、佐賀大学後藤隆太郎研究室の山下莉奈共同。その調査は2019年8月~12月に実施した「移住者居住地選択とライフスタイル」アンケート(有効回答数46名)の結果を用いる。
4. 集落単位は、1つの自治組織(行政的な社会単位)を構成する集団またはその一部であり、かつ家屋が一定規模の空間的まとまり(10戸程度以上)をもって集まっているものとして、筆者により判断した。
5. 「集落離れ」は、空間的なまとまり(領域)から離れてある住まい。

参考文献

- 1) 佐久間康富, 山崎義人, 「住み継がれる集落をつくる営みのなかの「農村協働力」-『住み継がれる集落をつくる交流・移住・通いで生き抜く地域』の再読-」, 農村計画学会誌, 第36巻, 第4号, pp. 500-503, 2018年
- 2) 西村亮介, 嘉名光市, 佐久間康富, 「過疎地域の地区運営活動における地元住民と移住者の関係の変遷に関する研究-和歌山県那智勝浦町色川地区を事例に-」, 都市計画論文集, 第50巻, 第3号, pp. 1303-1309, 2015年
- 3) 筒井-伸, 佐久間康富, 嵩和雄 「都市から農山村への移住と地域再生-移住者の起業継業の視点から-」, 農村計画学会誌, 第34巻, 第1号, pp. 45-50, 2015. 6
- 4) 小山環, 十代田朗, 津々見崇, 「過疎地域における都市農村交流施設が中間組織として果たす役割に関する研究-長野県飯山市なべくら高原森の家を事例として-」, 日本都市計画学会都市計画論文集Vol.1.50 No. 2, 2015年10月
- 5) 長谷川崇, 岩佐明彦, 會澤裕貴, 大図健太郎, 河野泰教, 田沢孝紀, 「移住者の働きかけによる過疎集落の空間的・社会的変容-「浜メグリ」による建築ストック利用の可能性-」, 日本建築学会計画系論文集, 第76巻, 第668号, pp. 1791-1798, 2011年